



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	きょうだい構成が子どものソーシャルスキルの程度に与える影響( fulltext )
Author(s)	相川,充
Citation	東京学芸大学紀要. 総合教育科学系, 61(1): 91-105
Issue Date	2010-02-00
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/107254">http://hdl.handle.net/2309/107254</a>
Publisher	東京学芸大学学術情報委員会
Rights	

## きょうだい構成が子どものソーシャルスキルの程度に与える影響

相 川 充\*

教育心理学講座

(2009年9月28日受理)

### 問題と目的

本研究は、子どものソーシャルスキル (social skills) の獲得の程度に、きょうだい構成が影響しているか否かを検討するものである。

これまで数多く試みられてきたソーシャルスキルの学術的定義は、ソーシャルスキルの行動的側面を強調した定義、能力的側面を強調した定義、さらにこの2分類に収まらない定義に分類できる。このようなさまざまな定義の共通点を抽出すると、①対人関係の中で用いられる、②個人がその対人関係において得ようとする目標の達成をめざして使われる、③学習されたもの、④言語的側面と非言語的側面の両方が含まれる、⑤認知と行動の両方の要素から成る、⑥実行に関しては効果性と適切性が問われる、などがある(相川, 2007)。ソーシャルスキルとは、これらの総体ということであるが、本研究では以上の共通点を考慮に入れて「対人関係における自らの目標達成をめざして、相手に適切かつ効果的に反応するために用いられる言語的・非言語的な対人反応」と定義しておく。

このソーシャルスキルは、上記の共通点にも挙げたように「学習されたもの」である。その学習のメカニズムは、「言語的教示」、「オペラント条件づけ」、「モデリング」、「リハーサル」という4つの学習原理に分けることができる(King & Kirschenbaum, 1992)。子どもが「言語的教示」で学習するとは、家族、友人や知人、級友や先輩などからソーシャルスキルに関することを言葉で言われて、それによってソーシャルスキルを獲得することである。

「オペラント条件づけ」で学習するとは、偶然にとった対人反応や、言語的教示に従って実行した対人反応が肯定的な結果をもたらしたとき、子どもが肯定的結果を再び得ようとして、その対人反応を繰り返すようになることであり、反対に、自分の対人反応が否定的な結果をもたらしたときには、その対人反応をとらないようになることである。つまり、子どもは自分がとった行動の結果、からソーシャルスキルを学ぶのである。

「モデリング」で学習するとは、子どもが、ほかの人のとった対人反応がどんな結果をもたらしているのか観察することによって、ソーシャルスキルを学ぶことである。肯定的な結果をもたらすことを観察すれば、子どもはその対人反応を実際にまねてみようとする。否定的な結果をもたらすことを観察すれば、そのような対人反応を抑制する。子どもは、両親、きょうだい、親類、友人知人、教師や近隣の大人など、実在している人物ばかりでなく、テレビや映画や小説の登場人物や架空の人物などもモデルに選ぶ。尊敬している人、権威のある人、自分と何か共通点のある人を選ぶ傾向にある。

「リハーサル」で学習するとは、子どもが、ある対人反応の仕方を記憶に留めるために、短期記憶内に貯蔵されている情報を意図的に、場合によっては無意図的に何度も繰返して想起することをいう。人間関係に関する知識を頭の中で何回も繰返し反復したり、口に出して言ったりする(言語リハーサル)、あるいは特定の対人反応を実際に何回も反復したりする(行動リハーサル)ことである。

以上のように子どもが4つの学習原理でソーシャル

\* 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)

スキルを獲得するならば、子どもの身近にいる家族の影響は計り知れないものがある。保護者の立場にある成人の言動が子どものソーシャルスキルの獲得に多大な影響を与えることは言を俟たないが、きょうだいもまた、子どものソーシャルスキルの獲得に強い影響を与えるのではないだろうか。なぜならば、きょうだいは日常生活の中で「言語的教示」を与える機会を持ち、誉めたり叱ったりする「オペラント条件づけ」を与える機会も持ち、きょうだい自身がモデルになって「モデリング」効果を促進する役目を負うこともできるからである。

きょうだいの存在がソーシャルスキルの獲得に影響することは、ソーシャルスキル不足が起こる原因の1つに少子化が挙げられている(小林, 1999)ことから推測できる。少子化とは、1992年度の国民生活白書で使われた語であり「出生率が低下し、子どもの数が減少すること」(新村, 1998)であるが、「子どもの数が減少する」とは、きょうだい数の減少をも意味する。きょうだい数の減少がソーシャルスキル不足の原因の1つであるということは、きょうだいがソーシャルスキルの獲得に影響していると言っているのと同じことである。

このように、きょうだいの存在が影響することは予測できるが、では、なぜ、きょうだい構成がソーシャルスキルの獲得に影響するのであろうか?その理由を考えるために、きょうだい構成に関するこれまでの研究成果を概観しておく。

これまでの研究が扱ってきた、きょうだい構成についてのテーマは、知的能力と性格に関するものが圧倒的に多い。海外では、出生順位と知的能力に関する研究が古くから行われ、現在も活発に行われている(Belmont & Marolla, 1973, Zajonc & Sulloway, 2007, Kristensen & Bjerkedal, 2007など)が、ソーシャルスキルとの関連で注目すべきは、出生順位と性格の関連に関する研究であろう。

依田・深津(1963)、浜崎・依田(1985)は、長子の性格として、自制的、ひかえめ、親切などを挙げ、次子の性格として、快活、甘ったれ、依存的などを挙げ、3人きょうだいの中の子には明瞭な特徴がないと指摘している。Sulloway(1996)は、後から生まれたきょうだいの方が革新性や創造性が高い分、長子が保守的であることを示唆している。平林・藤谷(2002)は、依田らが使ったのと同じ性格特性を調査する質問項目51項目を使用し、長子は自制的、責任感が強く、末子は人に甘え、依存的で負けず嫌い、そして1人っ子はおしゃべりで、外でよく遊ぶと指

摘している。

このように、きょうだい構成が性格形成に影響を及ぼす理由は、出生順位によって子どもへの養育者の関わり方と、出生順位に伴って生じるきょうだい間の相互作用のあり方が変化するからである(福島, 2010)。この2つの要因が家庭の中で、ない交ぜになって子どもの性格形成に影響を及ぼすのであろうが、この2つの要因はそのまま、きょうだい構成がソーシャルスキルの獲得に影響を及ぼす理由になると考えられる。つまり、第1子は、文字通り最初の子どもであるため、子育てに不慣れな養育者は、この子どもに多くの労力を注ぎ、期待もかける。進化心理学的に言えば、養育者は第1子を投資対象として優遇するのである(長谷川・長谷川, 2000)。このような養育者の関わり方は、長子がソーシャルスキルを獲得する機会を減らすことになる。なぜなら、長子は自らの存在をあえて主張しなくても、その存在を養育者から十分に認められているからである。また、第1子は、第2子以降が誕生しても、年齢が上で既に肉体的に成長しているという絶対的な力を背景に、きょうだいの間で社会的勢力(social power)を持ちうる(Sutton-Smith & Rosenberg, 1968)。この社会的勢力にものを言わせれば、第1子は、交渉や譲歩などのソーシャルスキルを使うことなく自らの目標を達成する(自らの欲求を満たす)ことができる。したがって第1子はきょうだい間の相互作用においてもソーシャルスキルを獲得する機会が少ないと考えられる。さらに第1子は、ソーシャルスキルの獲得の学習原理である「言語的教示」を与えたり、「オペラント条件づけ」の原理に則って誉めたり叱ったり、「モデリング」でのモデルになったりする家族の数が、第2子以降に比べれば、ほかに子どもがいない分だけ少ない。しかも多くの場合、家族内で第1子のソーシャルスキルの学習を促すのは大人だけである。

これに対して第2子以降は、子育てに慣れ、子どもに対する期待の薄くなった養育者から育てられることになる。養育者が子どもにかかる労力は第1子と比べれば、子どもの人数に応じて減少せざるを得ない。第2子以降は、自らの存在を養育者にアピールする必要があり、そのためにソーシャルスキルの獲得が促されると考えられる。また、社会的勢力の差が存在する年下の子どもは、きょうだい間の相互作用において不利な立場に置かれることになる。この状況でできるかぎり利益を得ようとするために、ほかのきょうだいに適切かつ効果的に対応する言語的、非言語的な対人反応を身につけることが促進さ

れる。さらに、第2子以降は、生まれたときから大人以外の子どもが家族内にいる。このきょうだいが、ソーシャルスキルに関する「言語的教示」を与え、「オペラント条件づけ」の機能を果たし、良いモデルにも悪いモデルにもなって「モデリング」機能を果たして、ソーシャルスキルの獲得を促すと考えることができる。

1人っ子的場合は、第1子の子どもが置かれている状況が強調されて現れると考えられる。つまり、1人っ子は、最初で最後の子どもであり、養育者から多くの労力と期待をかけられ、唯一の投資対象として優遇される。家族内に子どもがいないことから、1人っ子は、自らの存在を養育者にアピールする必要はない。そのため、養育者との関わりにおいてソーシャルスキルの獲得を促される機会は少ない。黙っていても養育者が対応してくれることが多いからである。ライバルになるきょうだいがいないために、きょうだい間での相互作用は存在しない。葛藤もなければ巧妙な交渉やつらい妥協を経験することもないために、ソーシャルスキルを獲得する必要性が少ない。さらにソーシャルスキルの獲得をうながす「言語的教示」「オペラント条件づけ」「モデリング」の機能は、家族内においては大人が果たすのみである。したがって獲得するソーシャルスキルは、数が少ないだけでなく、質的には、多様性に欠けたり偏ったものになったりする恐れがあると考えられる（例えば、大人びたソーシャルスキルを獲得する）。

以上の考察は、双子の研究結果が傍証を与えている。双子のフィンランド人、11～12歳を対象にした研究（Pulkkinen, Vaalamo, Hietala, Kaprio, & Rose, 2003）では、同性の双子よりも異性の双子の方が高いレベルの社会的コンピテンスを示していた。その理由は、きょうだいが異性であるために、「心の理論」（Theory of Mind）の獲得なども含めて社会的学習の機会が多いからだと解釈されている。ただし、十分に社会化されていない4歳代のオーストラリアの双子を対象にした研究（Laffey-Ardley & Thorpe, 2006）では、はっきりした結果は得られていない。

本研究は、以上のような考察に基づき、「きょうだい構成の違いによって、ソーシャルスキルの獲得の程度が異なるであろう」という予測を検証することを目的とする。本研究は探索的な調査ゆえに、どのようなきょうだい構成がソーシャルスキルの獲得の程度に違いをもたらすか具体的な仮説は立てないが、既に述べたような理由から、第1子や1人っ子の低いソーシャルスキル、第2子以降の高いソーシャルスキルを予想

している。

なお、本研究では「きょうだい構成」を、きょうだい数（例えば2人きょうだいと3人きょうだいの違い）と出生順位（例えば長子と中間子の違い）の2側面を含む概念として用いる。

## 方法

### 手続き

株式会社ベネッセコーポレーションが運営している小中学生向けのインターネットのサイト「ジュニアパーク」会員調査に、本研究で報告する質問項目以外も含む一連の質問項目から成るアンケートを置き、「ジュニアパーク」の小中学生の会員に回答を呼びかけた\*1。「会員」とは、ベネッセコーポレーションの特定の会員を意味するものではなく、サイト上で所定の手続きをして、「ジュニアパーク」のコンテンツを利用できるようになっている不特定の、地域の限定もない者のことである。

回答者は各自インターネットでサイトにアクセスし、モニター画面上に現れる質問項目に対して、クリックして回答した。全問回答者には500ポイント（500円相当）が与えられた。

回答者に対して、個人情報の取得はしていないこと、回答されたデータは研究上の分析とコンテンツ制作の参考資料として使用するがそれ以外の使用はあり得ないことを明記した。

調査実施期間は、2008年3月であった。

### 分析対象者

回答者は、小学1年生から中学3年生までであったが、分析対象者は、小学5年生以上、中学3年生までに絞った。また、明らかに不適切な回答をしているデータは削除した。その結果、分析対象になったのは、小学5-6年生376名、中学1-3年生372名、計748名（男子172名、女子576名）であった。

### アンケートの構成

アンケートの質問項目は、本研究で報告するもの以外も含まれていたが、ここでは本研究に関わる質問項目のみを記す。主に中学生版を示すが、小学生版は適宜、平仮名を使用し、表現を軟らかくした。

\* 1 本研究のデータは、著者がNPO法人教育テスト研究センター（CRET）の理事として、株式会社ベネッセコーポレーションのネットマーケティング部との共同研究の一環で収集したデータの一部であり、研究上の目的に限り、個人情報に配慮した上で使用を許可されているものである。

### 1. 回答者の属性、きょうだい構成に関する質問

- ・性別「あなたは、女の子、それとも男の子?」: 選択肢「女の子」「男の子」
- ・学年「あなたは何年生ですか?」: 小学生用選択肢「1ねんせい」「2年生」「3年生」「4年生」「5年生」「6年生」「その他」: 中学生用選択肢「中学1年生」「中学2年生」「中学3年生」「その他」
- ・きょうだいの人数:「あなたは(あなたをふくめて)何人きょうだいですか?」: 選択肢「きょうだいはいません(1人っ子)」「2人きょうだい」「3人きょうだい」「4人きょうだい」「5人以上」
- ・出生順位:「あなたは、きょうだいの中で上から何番目?」: 選択肢「1ばんとし上」「2ばん目」「3ばん目」「4ばん目」「5ばん目」
- ・きょうだいの性別「あなたと、あなたのきょうだいは、女の子?男の子?上から順番に性別を選んでね」:「1番とし上の人」: 選択肢「女の子、男の子、いない」,「2番目の人」: 選択肢「女の子、男の子、いない」,「3番目の人」: 選択肢「女の子、男の子、いない」,「4番目の人」: 選択肢「女の子、男の子、いない」,「5番目の人」: 選択肢「女の子、男の子、いない」

### 2. ソーシャルスキルに関する質問

本研究では、ソーシャルスキルの獲得の程度を自己評定式の尺度項目を使って測定することにした。

ソーシャルスキルという概念は包括的な概念であり、この概念の中には対人場面で用いられる具体的な複数の下位概念があると考えられる。そこで本研究では、ソーシャルスキルの概念を理解している研究者2人が、既存のソーシャルスキル尺度(嶋田・戸ヶ崎・岡安・坂野, 1996; 阿部, 2001; 渡邊・岡安・佐藤, 2002; 相川・藤田, 2005; 杉村・石井・張・渡部, 2007)の中から、小中学生が学校での友人関係を形成し、維持するのに必要と考えられる「関係開始スキル」「主張性スキル」「感情統制スキル」「関係配慮スキル」「自己表出スキル」「葛藤回避スキル」の6つのスキルを仮設し、これらの各スキルを測定する質問項目をそれぞれ8項目選択した(具体的な質問項目は、「結果」の「尺度項目の決定」およびTable 1を参照のこと)。

回答者には、上記の6つの下位スキルの順番で反応を求めた。回答は、「いいえ」「どちらかという、いいえ」「どちらかという、はい」「はい」の4件法で求めた。

### 3. 回答者の心理状態を探るための心理尺度

回答者の最近の心理状態を探るために、次のような既存の自己評定式の心理尺度を用いた。

①孤独感尺度5項目。前田(1995)より、「小学校」を「学校」に変えて5項目を選択した。

②ストレス反応尺度13項目。嶋田・戸ヶ崎・坂野(1994)の「小学生用ストレス反応尺度」から選択した。

③ソーシャルサポート認知尺度10項目。相川(2009)で用いられた「情緒・評価的サポート」「手段・情報的サポート」各5項目を選択した。

④攻撃性15項目。嶋田・神村・宇津木・安藤(1998)の「中学生用攻撃性質問紙」より選択した。

回答は、「孤独感尺度」と「攻撃性尺度」は、「いいえ」「どちらかという、いいえ」「どちらかという、はい」「はい」の4件法で求めた。「ストレス反応尺度」と「ソーシャルサポート認知尺度」は、「ぜんぜんあてはまらない」「あまりあてはまらない」「すこしあてはまる」「よくあてはまる」の4件法で求めた。

### 4. 回答者の家族との会話の程度

回答者が家族とどの程度会話をしているかを探るために、「おうちの人とはいつも、どのくらい話しをしますか?」と尋ねて、「学校でのできごとについて」「勉強や成績のことについて」「将来や進路のことについて」「友だちのことについて」「社会のできごとやニュースについて」の5項目を挙げた。回答は、「よく話す」「ときどき話す」「あまり話さない」「ぜんぜん話さない」の4件法で求めた。

## 結果

### 尺度項目の決定

#### 1. ソーシャルスキルに関する尺度

本研究では、包括的なソーシャルスキルの下位スキルとして「関係開始スキル」「主張性スキル」「感情統制スキル」「関係配慮スキル」「自己表出スキル」「葛藤回避スキル」という6つを仮設した。そこで、この6つの下位スキルをそれぞれ独立した6つの尺度とみなして、各尺度を構成する8項目について、G-P分析や因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行い、信頼性の高い尺度を構成する質問項目を残す作業を行った。その結果をまとめたのがTable 1である。Table 1は、6つの尺度に対して個別に行った項目分析の結果、各尺度を構成する項目として決定したものをまとめて示している。

「関係開始スキル」はTable 1に示した5項目で構成された( $a = .91$ )。項目分析で落ちた項目は、「はじめての人に話しかけるのはニガテです」「新しいクラスでなかなか友だちができません」「はじめて会った人に話しかけられても明るくこたえられます」の3項目である。

Table 1 ソーシャルスキルの下位尺度ごとの因子分析結果 n = 748 \*: 逆転項目

No	質問項目	因子負荷量
【関係開始スキル】 5項目 $\alpha = .91$		
1-1	はじめて会った人とすぐに「なかよし」になります。	0.88
1-2	はじめて会った人に自分から話しかけることができます。	0.88
1-4	新しい友だちをつくるのが得意です。	0.86
1-7	人となかよしになるには時間がかかります。(*)	-0.74
1-5	はじめて会う人でも気がるにあいさつができます。	0.73
【主張性スキル】 5項目 $\alpha = .80$		
2-5	自分の意見や考えを気がるに言えます。	0.82
2-6	言いたいことがあっても、言わないことが多いです。(*)	-0.78
2-3	ほかの人と意見や考えがちがっても、自分の考えは、はっきりと言えます。	0.74
2-4	友だちにいやなことをされてハラがたった時は、そのことを言います。	0.51
2-1	友だちにいやなことをされた時、がまんしてしまいます。(*)	-0.43
【感情統制スキル】 5項目 $\alpha = .72$		
3-6	一度、イヤなことがあると、なかなかものごとに集中することができません。(*)	0.70
3-4	カッとなると後で後悔(こうかい)するようなことをしてしまいます。(*)	0.66
3-2	何かうまくいかないことがあった時に、人に八つ当たりしてしまいます。(*)	0.56
3-7	「こわい」と感じると、どうしたらよいかわからなくなってしまいます。(*)	0.49
3-1	気をつけていても、気もちがすぐに顔にでてしまいます。(*)	0.34
【関係配慮スキル】 4項目 $\alpha = .86$		
4-1	あなたの友だちがなにかで失敗したら、あなたはその友だちをはげめます。	0.85
4-2	こまっている友だちがいたら、助けてあげます。	0.79
4-3	友だちのたのみをきいてあげます。	0.65
4-7	友だちがなにかをやりとげたとき、いっしょによるこびます。	0.55
【友情形成スキル】 3項目 $\alpha = .71$		
4-5	なかまに入りたそうにしている人がいたら、さそいます。	0.95
4-8	友だちが一人でさびしそうときは、声をかけます。	0.59
4-6	気まずいことがあっても、その友だちを仲直りできます。	0.40
【自己表出スキル】 5項目 $\alpha = .85$		
5-7	自分の気もちをしぐさで友だちにつたえることができます。	0.77
5-3	自分からうまく話をすすめることができます。	0.75
5-6	身ぶり手ぶりをまじえて話すのがとくいです。	0.73
5-5	顔の表情がゆたかなほうです。	0.72
5-2	いつも「えがお」で人に会うことができます。	0.71
【葛藤回避スキル】 3項目 $\alpha = .70$		
6-8	自分のしてほしいことを人にむりやりやらせることがあります。(*)	0.77
6-7	まずいことは友だちのせいにすることがあります。(*)	0.66
6-2	友だちにけんかをしかけることがあります。(*)	0.60

「主張性スキル」も5項目で構成された( $\alpha = .80$ )。項目分析で落ちた項目は、「人からなにかをたのまれた時、イヤと言えません」「友だちにさそわれても、行きたくない時は、ことわることができます」「友だちでもイヤなお願いはことわれます」の3項目である。

「感情統制スキル」も5項目で構成された( $\alpha = .72$ )。項目分析で落ちた項目は、「はらが立ってもカッとせずにおちついて行動できます」「あせっていても、おちついて行動ができるほうです」「こまったときでも顔に出さずにいられます」の3項目である。

「関係配慮スキル」は用意した8項目では1因子に

収束せず、2因子が構成された。第1因子は4項目で構成された( $\alpha = .86$ )。項目内容から判断してこの因子を「関係配慮スキル」とした。第2因子は3項目で構成された( $\alpha = .71$ )。項目内容から判断してこの因子を「友情形成スキル」と命名した(項目内容はTable 1を参照のこと)。本研究ではこの因子も新たな下位尺度としてこれ以降の分析で用いることにした。なお、用意した8項目のうち、どちらの因子に対しても因子負荷量が低かった項目は「友だちをおどかしたり、いばったりすることがあります」である。

「自己表出スキル」はTable 1に示した5項目で構成さ

れた ( $\alpha = .85$ )。項目分析で落ちた項目は、「自分が今どんな気もちでいるかを、うまく相手に伝えられます」「やさしい話し方ができます」「うれしいことがあったとき、すぐに友だちに話しをします」の3項目である。

「葛藤回避スキル」は、項目分析の結果、1つの因子を構成したのは、Table 1 に示した3項目のみであった ( $\alpha = .70$ )。項目分析で落ちた項目は、「あなたにほかの子がぶつかってきたら、おこらずに注意することができます」「友だちがいじわるをしたり悪口(わるくち)を言ってきても、むしできます」「友だちがいじわるをしたり悪口(わるくち)を言っているときは、やめるように言えます」「こまったときは、友だちにそうだんします」「友だちと話をあわせることができます」の5項目である。

以上7つの下位スキル尺度の得点は、それぞれの尺度を構成する質問項目に対する4件法の反応に1点から4点までの得点を与えた。その上で、逆転項目に配慮して、各スキル尺度の名前が示す方向に向かって高得点になるように得点化した。

## 2. 回答者の状態を探るための心理尺度

①孤独感尺度：因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行い、5項目すべてが使えることを確認した ( $\alpha = .85$ )。

②ストレス反応尺度：因子分析の結果、2因子が抽出された。項目内容から判断して8項目から成る第1因子を「抑うつ・身体反応」( $\alpha = .90$ )、5項目から成る第2因子を「無気力」( $\alpha = .92$ )と命名した。

③ソーシャルサポート認知尺度：因子分析の結果、10項目で1因子を構成していると判断した ( $\alpha = .94$ )。

④攻撃性尺度：因子分析の結果、3因子が抽出された。項目内容から判断して4項目から成る第1因子を「身体的攻撃」( $\alpha = .83$ )、5項目から成る第2因子を「敵意」( $\alpha = .83$ )、4項目から成る第3因子を「短気」( $\alpha = .82$ )と命名した。

以上の結果をまとめたのが Table 2 である。

以上7つの心理尺度の得点は、それぞれの尺度を構成する質問項目に対する4件法の反応に1点から4点までの得点を与え、逆転項目に配慮して、各尺度の名前が示す方向に向かって高得点になるように得点化した。

## きょうだい構成に関する人数

### 1. きょうだい数

分析対象者748名を、きょうだいの人数によって分類したところ、「1人っ子」141名、「2人きょうだい」366名、「3人きょうだい」192名、「4人きょうだい」44名、「5人きょうだい以上」5名であった。きょうだ

い数に関する分析においては、「5人きょうだい以上」の数が少ないため除外した。なお、分析によっては「4人きょうだい」も他の分類に比べて人数が少ないので除外した場合もあった。

### 2. 出生順位

分析対象者748名を、出生順位によって分類したところ、「1人っ子」141名、「長子」349名、「中間子」(ただし3人きょうだいの中間子だけでなく、4人きょうだいの2番目や3番目も含む)86名、「末子」172名であった。人数分布から判断して、これ以降の出生順位別の分析では「1人っ子」、「長子」、「中間子」、「末子」の4タイプで比較を行った。

### きょうだい構成とソーシャルスキルの関係に関する分析

きょうだい数ごとの各下位スキルの平均値とSDを Table 3 にまとめた。また、出生順位と性別ごとの各下位スキルの平均値とSDは、Table 4 にまとめた。

以下、ソーシャルスキルに関する7つの下位スキルごとに分析結果を記述する。

#### 1. 関係開始スキル

きょうだい数によって関係開始スキルの平均値 (Table 3 を参照のこと) に差があるか否かを検討するために、1要因4水準の分散分析を行った結果、有意であった ( $F(3,739) = 2.78, p < .05$ )。多重比較の結果、「1人っ子 (14.21)」が「3人きょうだい」(12.95)より有意に大きかった。なお、「1人っ子」と「4人きょうだい」(12.89)の間には有意差はなかった。

きょうだい数と性別の交互作用を検討するために、きょうだい数(1人っ子・2人きょうだい・3人きょうだい)×性別(男・女)の2要因分散分析を行った(「4人きょうだい」は人数が他に比べて少ないので性別の分析では除外した。以下、他のスキルの分析でも同様である)が、性別は、主効果 ( $F(1,693) = 0.13$ )も、きょうだい数との交互作用 ( $F(2,693) = 1.14$ )も有意ではなかった。

出生順位と性別によって関係開始スキルの平均値 (Table 4 を参照のこと) に差があるか否かを検討するために、出生順位(4水準)×性別(2水準)の2要因分散分析を行った。その結果、出生順位の主効果が有意な傾向にあった ( $F(3,740) = 2.13, p < .10$ )。多重比較の結果、「1人っ子 (14.23)」が「長子」(13.13)よりも高かった。性別は、主効果 ( $F(1,740) = 0.39$ )も、出生順位との交互作用 ( $F(3,740) = 0.78$ )も有意ではなかった。

以上まとめると、関係開始スキルに関して、性差はなく、1人っ子は3人きょうだいよりも、また1人っ子は長子よりも得点が高かった。

Table 2 心理尺度ごとの因子分析結果 n=748 \* : 逆転項目

No	質問項目	因子負荷量
<b>【孤独感】 5項目 <math>\alpha = .85</math></b>		
1-2	学校で、ひとりぼっちだと思いますか。	0.88
1-4	学校で、みんなからなかまはずれにされていると思いますか。	0.83
1-3	学校では、お友だちがいなくてさびしいですか。	0.66
1-1	学校で、お話しするお友だちはいますか。(*)	-0.65
1-5	だれかにてつだってほしいとき、たのめるお友だちはいますか。(*)	-0.64
<b>【ストレス反応：抑うつ・身体反応】 8項目 <math>\alpha = .90</math></b>		
2-5	かなしい。	0.87
2-7	気もちがしずんでいる。	0.84
2-6	なんだか、こわい感じがする。	0.79
2-3	気もちが悪い。	0.70
2-8	なんとなく、しんばいである。	0.70
2-1	ずつうがする。	0.62
2-2	体がだるい。	0.60
2-4	つかれやすい。	0.49
<b>【ストレス反応：無気力】 5項目 <math>\alpha = .92</math></b>		
2-11	なにかに集中できない。	0.97
2-10	勉強が手につかない。	0.90
2-12	なにもやる気がしない。	0.81
2-9	あまりがんばれない。	0.64
2-13	体から、力がわかない。	0.59
<b>【ソーシャルサポート認知】 10項目 <math>\alpha = .94</math></b>		
3-6	クラスの友だちは、わたしが何かこまっていると、助けてくれる。	0.84
3-1	クラスの友だちは、わたしがこまったときに、どうしたらよいかいっしょに考えてくれる。	0.83
3-7	クラスの友だちは、わたしが人からせめられたときは、助けてくれる。	0.83
3-8	クラスの友だちは、わたしが一人では終わらない事があったとき、てつだってくれる。	0.82
3-1	クラスの友だちは、わたしに何かうれしいことがあったときは、それを自分のことのようによるこんでくれる。	0.82
3-9	クラスの友だちは、ふだんから、わたしの気もちをわかってくれる。	0.81
3-5	クラスの友だちは、わたしがふまんを口にしても、聞いてくれる。	0.80
3-2	クラスの友だちは、わたしの都合(つごう)がつかないときは、かわりにやってくれる。	0.78
3-3	クラスの友だちは、わたしがテストで悪いせいせきをとったら、なくさめてくれる。	0.71
3-4	クラスの友だちは、わたしが忘(わす)れものをしたときに、かしてくれる。	0.64
<b>【攻撃性：身体的攻撃】 4項目 <math>\alpha = .83</math></b>		
4-1	たたかれたり、けられたりしたら、かならずやりかえす。	0.77
4-4	からかわれたら、たたいたり、けったりするかもしれない。	0.69
4-6	自分をまもるためなら、ほうりよくをふるうのも、しかたない。	0.67
5-3	人にらんぼうなことをしたことがある。	0.59
<b>【攻撃性：敵意】 5項目 <math>\alpha = .83</math></b>		
5-4	本気でいやだとおもう人がたくさんいる。	0.83
4-8	友だちのなかにはいやな人が多い。	0.81
5-5	わたしの悪口を言う人が多いとおもう。	0.66
5-2	ふだんかよくしていても、本当にこまったとき、たすけてくれない友だちもいると思う。	0.57
4-2	友だちにばかにされているかもしれない。	0.46
<b>【攻撃性：短気】 4項目 <math>\alpha = .82</math></b>		
4-3	すぐにおこるほうだ。	0.60
4-5	すぐにけんかをしてしまう。	0.57
5-7	よく口げんかをする。	0.53
5-1	ちょっとしたことではらがたつ。	0.51



## 2. 主張性スキル

きょうだい数によって主張性スキルの平均値 (Table 3 を参照のこと) に差があるか否かを検討するために、1 要因の分散分析を行った結果、有意な傾向があった ( $F(3,739)=2.48, p<.10$ )。多重比較の結果、「1 人っ子」(13.23) が「3 人きょうだい」(12.33) より高い傾向にあった。なお、「1 人っ子」と「4 人きょうだい」(12.20)の間には有意差はなかった。

きょうだい数と性別の交互作用を検討するために、きょうだい数(3)×性別(2)の2要因分散分析を行ったところ、性別の主効果が有意であり ( $F(1,693)=11.88, p<.01$ )、男子(13.68)が女子(12.56)よりも高かった。きょうだい数と性別の交互作用は有意ではなかった ( $F(2,693)=0.92$ )。

出生順位と性別によって主張性スキルの平均値 (Table 4 を参照のこと) に差があるか否かを検討するために、出生順位×性別の2要因分散分析を行った。その結果、出生順位の主効果は有意ではなかった ( $F(3,740)=0.47$ )。性別は、主効果は有意であったが ( $F(1,740)=9.87, p<.01$ )、出生順位との交互作用は有意ではなかった ( $F(3,740)=0.37$ )。

以上まとめると、主張性スキルに関して、男子の方が女子よりも得点が高かった。1 人っ子は 3 人きょうだいよりも得点が高かった。出生順位による違いは認められなかった。

## 3. 感情統制スキル

きょうだい数によって感情統制スキルの平均値 (Table 3 を参照のこと) に差があるか否かを検討するために1 要因の分散分析を行ったが、有意ではなかった ( $F(3,739)=1.26$ )。

きょうだい数と性別の交互作用を検討するために、きょうだい数(3)×性別(2)の2要因分散分析を行ったところ、性別の主効果は有意ではなかった ( $F(1,693)=0.11$ ) が、両要因の交互作用は有意であった ( $F(2,693)=3.53, p<.05$ )。下位検定の結果、Fig. 1 に示したように、女子においてはきょうだい数が違ってても得点に差が認められなかったが、男子においては、「2 人きょうだい」(13.40) が「1 人っ子」(11.74) や「3 人きょうだい」(11.84) よりも有意に ( $p<.05$ ) 高い得点を示した。また、男子の「2 人きょうだい」は、女子の「2 人きょうだい」(12.25) よりも有意に ( $p<.05$ ) 高い値を示した。

Table 3 きょうだい数ごとの各下位スキルの平均値, SD

N=743

きょうだいの数→ スキル↓	1 人っ子 n=141	2 人きょうだい N=366	3 人きょうだい n=192	4 人きょうだい n=44
関係開始	14.21 (4.08)	13.16 (4.16)	12.95 (4.61)	12.89 (5.05)
主張性	13.23 (3.50)	12.94 (3.32)	12.33 (3.67)	12.20 (4.05)
感情統制	12.20 (3.49)	12.51 (3.33)	12.00 (3.35)	12.73 (3.19)
関係配慮	13.75 (1.91)	13.68 (2.08)	13.68 (2.25)	12.84 (2.45)
友情形成	9.34 (1.70)	9.15 (1.81)	9.07 (1.91)	8.98 (1.99)
自己表出	14.43 (3.37)	13.73 (3.59)	13.59 (3.53)	13.32 (4.07)
葛藤回避	5.29 (1.93)	5.46 (2.01)	5.24 (1.88)	5.70 (1.98)

Table 4 出生順位ごとの各下位スキルの平均値, SD

N=748

出生順位 性別 スキル↓	1 人っ子		長子		中間子		末子	
	男子 n=39	女子 n=102	男子 n=88	女子 n=261	男子 n=16	女子 n=70	男子 n=29	女子 n=143
関係開始	14.28 (3.77)	14.19 (4.20)	13.36 (4.32)	12.89 (4.10)	12.44 (5.03)	13.91 (4.84)	12.83 (4.80)	13.03 (4.52)
主張性	13.85 (2.87)	12.99 (3.70)	13.64 (3.06)	12.28 (3.48)	13.94 (4.25)	12.34 (3.86)	13.48 (2.89)	12.80 (3.52)
感情統制	11.74 (3.27)	12.37 (3.57)	13.36 (3.64)	12.26 (3.15)	10.81 (2.99)	12.43 (3.74)	12.69 (3.70)	12.00 (3.08)
関係配慮	12.79 (2.10)	14.12 (1.71)	12.88 (2.39)	13.87 (2.00)	12.69 (2.09)	13.97 (2.06)	12.41 (1.80)	13.79 (2.27)
友情形成	8.95 (1.72)	9.49 (1.68)	8.89 (1.80)	9.13 (1.78)	9.00 (2.16)	9.16 (1.85)	8.79 (1.70)	9.29 (2.04)
自己表出	13.62 (3.24)	14.74 (3.38)	13.00 (3.37)	13.64 (3.47)	12.94 (4.43)	14.20 (3.68)	13.48 (2.89)	14.02 (3.99)
葛藤回避	9.64 (1.72)	9.74 (2.01)	9.30 (1.74)	9.78 (1.92)	9.25 (1.98)	9.60 (1.95)	9.48 (2.50)	9.53 (2.10)

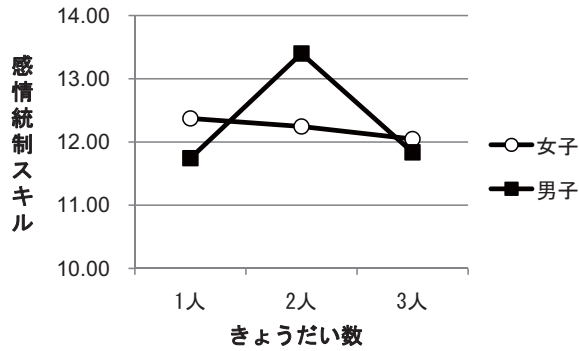


Fig.1 感情統制スキルにおけるきょうだい数と性別の交互作用

出生順位と性別によって感情統制スキルの平均値 (Table 4 を参照のこと) に差があるか否か検討するために、出生順位×性別の2要因分散分析を行った。その結果、出生順位の主効果が有意であった ( $F(3,740)=2.67, p<.05$ )。多重比較の結果、「長子」(12.81) が「中間子」(11.62) よりも高かった ( $p<.10$ )。性別は、主効果は有意ではなかったが ( $F(1,740)=0.11$ )、出生順位との交互作用は有意であった ( $F(3,740)=3.45, p<.05$ )。下位検定の結果、Fig. 2 に示したように、女子においては出生順位によって得点に差が認められなかったが、男子においては、「長子」(13.36) が「1人っ子」(11.74) よりも高い傾向があり ( $p<.10$ )、「中間子」(10.81) よりも有意に高かった ( $p<.05$ )。また、男子の「長子」は、女子の「長子」(12.26) よりも有意に高く ( $p<.01$ )、男子の「中間子」は、女子の「中間子」(12.43) よりも低い傾向 ( $p<.10$ ) にあった。

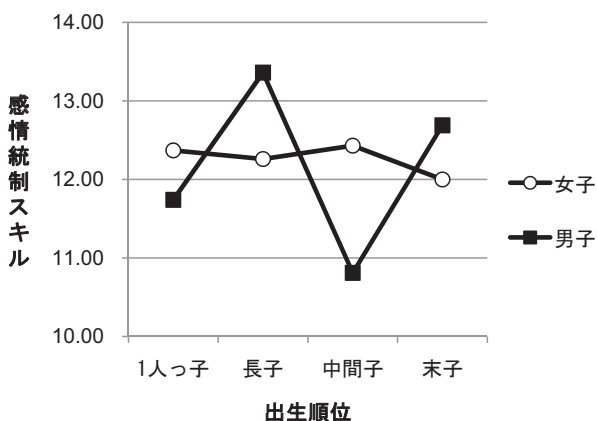


Fig.2 感情統制スキルにおける出生順位と性別の交互作用

以上まとめると、感情統制スキルに関して、男子においてのみ、2人きょうだいは、1人っ子や3人きょうだいよりも高得点を示し、男子の2人きょうだいは、

女子の2人きょうだいよりも高得点を示した。また、長子は中間子よりも高い値を示した。さらに、男子においてのみ、長子は1人っ子や中間子よりも高得点を示し、男子の長子は、女子の長子よりも高得点を示した。ただし、男子の中間子は女子の中間子よりも低い値を示した。きょうだい数と出生順位の結果を合わせて考えると、2人きょうだいのうちの長男が、高い得点を示した可能性がある。

#### 4. 関係配慮スキル

きょうだい数によって関係配慮スキルの平均値 (Table 3 を参照のこと) に差があるか否かを検討するために1要因の分散分析を行った結果、有意な傾向があった ( $F(3,739)=2.280, p<.10$ )。多重比較の結果、「4人きょうだい」(12.84) が、他のきょうだい数よりも低い傾向にあった ( $p<.10$ )。

きょうだい数と性別の交互作用を検討するために、きょうだい数(3)×性別(2)の2要因分散分析を行ったところ、性別の主効果が有意であり ( $F(1,693)=35.89, p<.01$ )、男子(12.83) よりも女子(13.99) が高かった。きょうだい数と性別の交互作用は有意ではなかった ( $F(2,693)=0.62$ )。

出生順位と性別によって関係配慮スキルの平均値 (Table 4 を参照のこと) に差があるか否か検討するために、出生順位×性別の2要因分散分析を行った。その結果、出生順位の主効果は有意ではなかった ( $F(3,740)=0.57$ )。性別は、主効果は有意であったが ( $F(1,740)=34.13, p<.001$ )、出生順位との交互作用は有意ではなかった ( $F(3,740)=0.29$ )。

以上まとめると、関係配慮スキルに関して、男子よりも女子の方が得点が高かった。4人きょうだいは、他のきょうだい数よりも得点が低かった。出生順位による違いは認められなかった。

#### 5. 友情形成スキル

きょうだい数によって友情形成スキルの平均値 (Table 3 を参照のこと) に差があるか否かを検討するために1要因の分散分析を行ったが、有意ではなかった ( $F(3,739)=0.75$ )。

きょうだい数と性別の交互作用を検討するために、きょうだい数(3)×性別(2)の2要因分散分析を行ったところ、性別の主効果が有意であり ( $F(1,693)=4.36, p<.05$ )、男子(8.92) よりも女子(9.28) が高かった。きょうだい数と性別の交互作用は有意ではなかった ( $F(2,693)=0.86$ )。

出生順位と性別によって友情形成スキルの平均値 (Table 4 を参照のこと) に差があるか否か検討するために、出生順位×性別の2要因分散分析を行っ

た。その結果、出生順位の主効果は有意ではなかった ( $F(3,740)=0.35$ )。性別は、主効果は有意な傾向にあったが ( $F(1,740)=3.67, p<.10$ )、出生順位との交互作用は有意ではなかった ( $F(3,740)=0.27$ )。

以上まとめると、友情形成スキルに関して、男子よりも女子の方が得点が高かったが、きょうだい数も出生順位も友情形成スキルには影響していなかった。

## 6. 自己表出スキル

きょうだい数によって自己表出スキルの平均値 (Table 3 を参照のこと) に差があるか否かを検討するために 1 要因の分散分析を行ったが、有意ではなかった ( $F(3,739)=1.99$ )。

きょうだい数と性別の交互作用を検討するために、きょうだい数 (3) × 性別 (2) の 2 要因分散分析を行ったところ、性別の主効果が有意であり ( $F(1,693)=7.93, p<.01$ )、男子 (13.21) よりも女子 (14.15) が高かった。きょうだい数と性別の交互作用は有意ではなかった ( $F(2,693)=0.07$ )。

出生順位と性別によって自己表出スキルの平均値 (Table 4 を参照のこと) に差があるか否かを検討するために、出生順位 × 性別の 2 要因分散分析を行った。その結果、出生順位の主効果は有意ではなかった ( $F(3,740)=1.59$ )。性別は、主効果は有意であったが ( $F(1,740)=5.89, p<.05$ )、出生順位との交互作用は有意ではなかった ( $F(3,740)=0.24$ )。

以上まとめると、自己表出スキルに関して、男子よりも女子の方が得点が高かったが、きょうだい数も出生順位も影響していなかった。

## 7. 葛藤回避スキル

きょうだい数によって葛藤回避スキルの平均値 (Table 3 を参照のこと) に差があるか否かを検討するために 1 要因の分散分析を行ったが、有意ではなかった ( $F(3,739)=1.01$ )。

きょうだい数と性別の交互作用を検討するために、きょうだい数 (3) × 性別 (2) の 2 要因分散分析を行ったが、性別は主効果も ( $F(1,693)=1.56$ )、きょうだい数との交互作用も有意ではなかった ( $F(2,693)=0.28$ )。

出生順位と性別によって葛藤回避スキルの平均値 (Table 4 を参照のこと) に差があるか否かを検討するために、出生順位 × 性別の 2 要因分散分析を行った。その結果、出生順位の主効果は有意ではなかった ( $F(3,740)=0.28$ )。性別は主効果も ( $F(1,740)=1.46$ )、出生順位との交互作用も有意ではなかった ( $F(3,740)=0.43$ )。

以上まとめると、葛藤回避スキルに関して、性別も、

きょうだい数も出生順位も影響していなかった

これまで、7つの下位スキルそれぞれの得点は、各下位スキルを構成する尺度項目得点の合計であった (例えば、「関係開始スキル」は5項目の合計点であり5点-20点の範囲であり、「友情形成スキル」は3項目の合計点であり3点-12点の範囲である) が、きょうだい数および出生順位で主効果が認められた「関係開始」「主張性」「感情統制」「関係配慮」の4スキルの得点を項目数で除した値をもとに、グラフ化した。このようにして Fig. 3 は、きょうだい数ごとに、「関係開始」「主張性」「関係配慮」の3スキルの程度を示したものであり、Fig. 4 は、出生順位ごとに「関係開始」「感情統制」の2スキルの程度を示したものである。

## きょうだい数と心理尺度の関係に関する分析

きょうだい数によって7つの心理尺度それぞれの平均値が異なるかを Table 5 にまとめた。

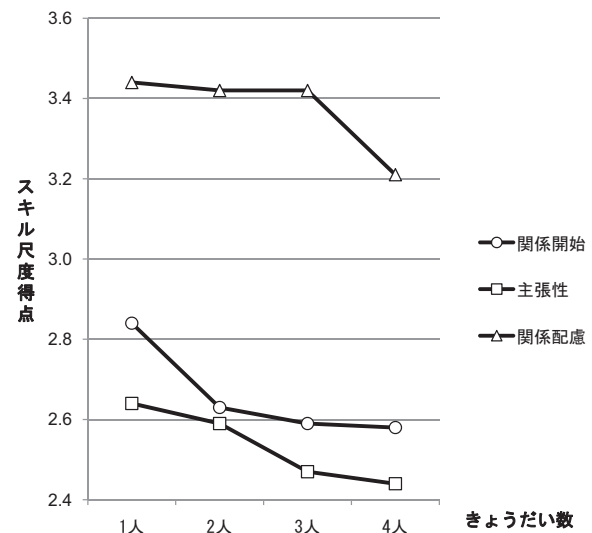


Fig.3 きょうだい数ごとの各下位スキルの程度

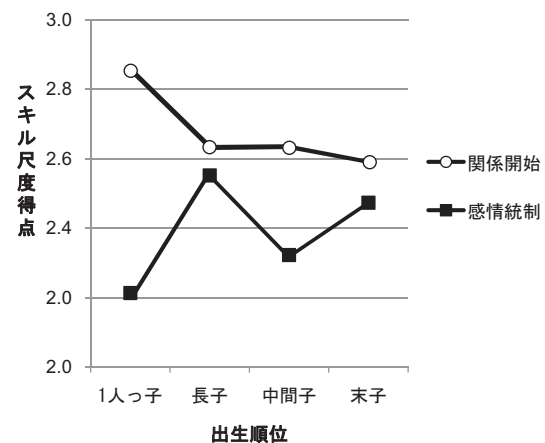


Fig.4 出生順位ごとのスキルの程度

心理尺度それぞれに関して1要因の分散分析を行った。その結果、有意差または有意な傾向が認められたのは、次の心理尺度であった。

「孤独感」(F(3,739)=2.56,  $p<.10$ ): 「4人きょうだい」は「2人きょうだい」( $p<.05$ )および「3人きょうだい」( $p<.10$ )よりも高い値を示していた。

「抑うつ・身体反応」(F(3,739)=2.80,  $p<.05$ ): 「4人きょうだい」は「1人っ子」よりも高い値を示していた ( $p<.10$ )。

「ソーシャルサポート」(F(3,739)=2.17,  $p<.10$ ): 「4人きょうだい」は「2人きょうだい」よりも低い値を示していた ( $p<.10$ )。

「敵意」(F(3,739)=2.80,  $p<.05$ ): 「4人きょうだい」は「2人きょうだい」よりも高い値を示していた ( $p<.10$ )。

「無気力」(F(3,739)=1.66), 「身体的攻撃」(F(3,739)=.091), 「短気」(F(3,739)=1.17) は、有意差は認められなかった。

差が認められた4つの尺度は、いずれも「4人きょうだい」が他のきょうだい数とは違った反応を示していた。つまり、孤独感、抑うつ・身体反応、敵意が高く、ソーシャルサポートが低かったのである。

念のため「4人きょうだい」を外して残りの699名に関して、「1人っ子」「2人きょうだい」「3人きょうだい」の3水準の分散分析を行ったが、きょうだい数による有意差は認められなかった。

#### きょうだい数と家族との会話の程度に関する分析

きょうだい数によって家族との会話の程度に違いが認められるか否かを検討するために、家族との会話の程度が多いほど高得点になるように得点化した上で、きょうだい数ごとの平均値をTable 6にまとめた。

会話の種類5項目ごとに1要因の分散分析を行った結果、「将来や進路のことについて」はきょうだい数による有意な差は認められなかった (F(3,739)=1.99)。残り4項目に関しては有意差または有意な傾向が認められた。

「学校でのできごと」(F(3,739)=2.23,  $p<.10$ ): 「1人っ子」は「3人きょうだい」よりも多く話していた ( $p<.10$ )。

「勉強や成績」(F(3,739)=2.25,  $p<.10$ ): 「2人きょうだい」は「3人きょうだい」よりも多く話していた ( $p<.10$ )。

「友だちのこと」(F(3,739)=7.37,  $p<.01$ ): 「1人っ子」は「2人きょうだい」( $p<.10$ ), 「3人きょうだい」( $p<.01$ ), 「4人きょうだい」( $p<.05$ )よりも多く話していた。また、「2人きょうだい」は「3人きょうだい」よりも多く話していた ( $p<.05$ )。

「社会のできごとやニュース」(F(3,739)=3.64,  $p<.05$ ): 「1人っ子」は「3人きょうだい」よりも多く話していた ( $p<.05$ )。また、「2人きょうだい」は「3人きょうだい」よりも多く話していた ( $p<.10$ )。

要するに、「1人っ子」または「2人きょうだい」

Table 5 きょうだい数ごとの心理尺度の平均, SD

きょうだいの数→ 心理尺度↓	1人っ子 n=141	2人きょうだい n=366	3人きょうだい n=192	4人きょうだい n=44
孤独感	7.35 (3.45)	7.03 (2.83)	7.17 (3.09)	8.36 (3.80)
抑うつ・身体反応	14.17 (6.88)	14.50 (6.18)	15.44 (6.47)	16.82 (6.68)
無気力	8.84 (4.54)	8.96 (4.45)	9.44 (4.71)	10.32 (4.59)
ソーシャルサポート	30.25 (7.69)	31.18 (7.12)	30.79 (7.18)	28.41 (7.37)
身体的攻撃	9.13 (3.54)	8.62 (3.45)	8.94 (3.35)	8.95 (3.55)
敵意	11.94 (4.17)	11.31 (3.84)	11.95 (4.07)	12.84 (3.83)
短気	8.56 (3.20)	8.27 (3.22)	8.74 (3.24)	8.84 (3.20)

Table 6 きょうだい数ごとの会話の程度の平均, SD

きょうだい数→ 会話↓	1人っ子 n=141	2人きょうだい n=366	3人きょうだい n=192	4人きょうだい n=44
学校でのできごと	3.48 (0.70)	3.38 (0.80)	3.27 (0.82)	3.25 (0.72)
勉強や成績	3.19 (0.80)	3.17 (0.79)	3.02 (0.78)	3.00 (0.75)
将来や進路	2.85 (0.94)	2.75 (0.89)	2.65 (0.86)	2.57 (0.87)
友人のこと	3.40 (0.78)	3.20 (0.83)	2.99 (0.90)	2.95 (0.94)
社会のできごとやニュース	2.86 (0.93)	2.76 (0.88)	2.56 (0.93)	2.59 (1.00)

の方が家族との会話が多い傾向が認められた。

## 考 察

本研究の目的は、「きょうだい構成の違いによって、ソーシャルスキルの獲得の程度が異なるであろう」という予測を検討することであった。結果は、この予測通り、きょうだい数または出生順位というきょうだい構成の違いによって、ソーシャルスキルの獲得の程度に違いが認められた。具体的には、「1人っ子」は、関係開始スキルに関して3人きょうだいや長子よりも高い得点を示し、主張性スキルに関して3人きょうだいよりも高い得点を示していた。「1人っ子」は、他者との関係を始めるスキル、他者との関係の中で自らの意見を主張するスキルを獲得していることが伺える。

「2人きょうだい」は、男子のみにおいて認められたことだが、感情統制スキルに関して1人っ子や3人きょうだいよりも高い値を示していた。また、女子の「2人きょうだい」よりも高い値を示していた。「2人きょうだい」の男子は、自らの感情を上手に統制するスキルを身につけていることが伺える。

「3人きょうだい」は、関係開始スキルと主張性スキルに関して1人っ子よりも低い得点を示していた。男子の「3人きょうだい」は、感情統制スキルに関して男子の「2人きょうだい」よりも低い値を示した。関係開始をするスキルも、主張するスキルも1人っ子よりは低く、さらに男子の場合、感情を統制スキルが2人きょうだいよりも低かった。

「4人きょうだい」は、関係配慮スキルが、ほかのきょうだい数よりも低い値を示していた。

出生順位で言えば、「長子」は、関係開始スキルに関して1人っ子よりも低い値を示し、感情統制スキルに関しては中間子よりも高い値を示していた。また男子「長子」つまり長男は、女子「長子」つまり長女よりも感情統制スキルに関して高い値を示した。長子、とりわけ長男は、感情を統制するスキルが高いことが伺える。きょうだい数と出生順位の結果を合わせて考えると、2人きょうだいのうちの長男に、その傾向が顕著であるかもしれない。

「中間子」は、感情統制スキルに関して長子よりも低い値を示し、男子の「中間子」は女子の「中間子」よりも低い値を示した。「中間子」とりわけ男子の「中間子」は感情を統制するのが下手である可能性がある。

「末子」は、本研究では大きな特徴が見受けられなかった。

以上のように、予測通り、きょうだい構成の違いに

よってソーシャルスキルの獲得の程度に違いが認められたが、その理由は、本研究が「問題」の部分で述べたような理由ではなかったと思われる。「問題」の部分では、きょうだい構成によってソーシャルスキルの獲得の程度に違いが現れる理由は、出生順位によって変化する養育者の関わり方と、出生順位に伴って生じるきょうだい間の相互作用のあり方だと述べた。この観点から、1人っ子、長子、第2子以降の特徴を予想したが、本研究の結果は、それらの特徴を裏付けるものではなかった。

「問題」では、1人っ子は、養育者との関わりにおいても、また、ほかのきょうだいの不在の点からしてもソーシャルスキルの獲得の程度は低いと予想していた。しかし、既に述べたように、1人っ子は、ほかのきょうだい構成の子どもよりも、他者との関係を始めるスキル、他者との関係の中で自らの意見を主張するスキルを獲得していることが示唆された。この原因の一つは、家族との会話の程度にあると考えられる。「おうちの人はいつも、どのくらい話しをしますか?」という質問に対して、「学校のできごとについて」、「友だちのことについて」、「社会のできごとやニュースについて」の3項目において、1人っ子はほかのきょうだい数の子どもよりも、家族つまり保護者と話しをしていた。平林・藤谷(2002)が1人っ子はおしゃべりだと指摘していたように、1人っ子は、きょうだいがいない分、保護者との会話量が多くなり、これを通じてソーシャルスキルの獲得が促されている可能性がある。

「問題」の部分では長子も、養育者の関わり方と、第1子ゆえに持つ社会的勢力の観点から、ソーシャルスキルの獲得の程度は、第2子以降に比べて低いと予想していた。しかし、関係開始スキルに関して1人っ子よりも低い値を示したものの、第2子以降と比べて目立って劣るスキルはなかったばかりか、感情統制スキルに関しては中間子よりも高い値を示していた。特に長男、たぶん2人きょうだいの長男は、感情統制スキルが高いことが伺えた。長子は、第2子以降の誕生に伴い、養育者の注意や関心が一時的にしろ減少し、また、自分よりも若い第2子以降のきょうだいと関わらざるを得ない状況に置かれる。これらのことが、第1子の感情統制スキルの獲得を促している可能性がある。

「問題」の部分では第2子以降は、1人っ子や長子に比べて、自らの存在を養育者にアピールするために、また、ほかのきょうだいとの相互作用があるために、ソーシャルスキルの獲得が促進されると予想した。本研究は、この予測も裏付けられなかった。男子の2人

きょうだいは、感情統制スキルにおいて1人っ子よりも高い値を示していたが、これは長男の可能性があるので第2子以降とは言えない。3人きょうだいは、関係開始スキルでも主張性スキルでも1人っ子よりも低く、男子の3人きょうだいは、感情統制スキルが2人きょうだいよりも低かった。「中間子」とりわけ男子の「中間子」は感情を統制するのが下手であることが示唆された。さらに4人きょうだいは、関係配慮スキルが、ほかのきょうだい数よりも低い値を示していた。このように、きょうだい数が増えると、むしろソーシャルスキルの獲得の程度は劣る傾向が伺えた。

家族との会話の程度は、3人きょうだいは、「学校のできごと」「勉強や成績」「友だちのこと」「社会のできごとやニュース」の4項目において1人っ子または2人きょうだいよりも少なかった。きょうだい数が増えることで保護者との会話量が減ることが伺えた。また、きょうだい数と心理尺度との関連を調べた結果では、4人きょうだいだけが、ほかのきょうだい数と比べて、孤独感、抑うつ・身体反応、敵意が高く、ソーシャルサポートが低かった。このような結果から判断すると、きょうだい数が増えることで、養育者の注意が一人一人の子どもに向かなくなり、また、家族内での相互作用が複雑になり、それらは、ソーシャルスキルの獲得に必ずしも促進的には作用しないことが伺えた。

ただし、本研究での回答者は、教育企業が開設しているインターネットのサイトで所定の手続きをしたうえで回答している小中学生である。回答者は、このようなことが可能である環境（経済的な意味でも、また、このようなことを可能にする養育者の教育レベルや教育に対する熱心さなどの点においても）が整っている家庭の子どもであり、しかも、回答に対しては意欲的であったと推測される。サンプルとしては偏っていると言わざるを得ない。この点からして本研究の結果は限定的である。

本研究では、きょうだい構成をきょうだい数と出生順位の観点で扱ったが、両者を別個に分析した。しかし、同じ長子でも2人きょうだいなのか、4人きょうだいなのかで異なるであろうし、また、同じ長子でも男子なのか女子なのか、さらには第2子以降の性別が男子なのか女子なのかによっても違いが生じるかもしれない。性別も考慮に入れたきょうだい構成のさまざまなパターンに対して、それぞれ十分な数のサンプルが採れるならば、きょうだい構成の効果に関する細かな結果が得られるであろう。ただし、2人きょうだいで性別を考慮すると「男-男」「男-女」「女-男」「女

-女」の4パターンが考えられ、しかも、回答者が第1子か第2子かによって8種類の回答者が必要になる。3人きょうだいなら8パターンで24種類の回答者が必要になる。きょうだい構成の効果を実格的に調査するには、何よりもサンプルを揃えるという問題を解決する必要がある。

## 引用文献

- 阿部 希 (2001). 学級単位によるソーシャルスキルトレーニングのための尺度の作成：児童と教師の視点から選定して平成13年度東京学芸大学教育学部卒業論文.
- 相川 充 (2007). ソーシャルスキル 坂本真士・丹野義彦 (編) 臨床社会心理学 (pp. 123-140) 東京大学出版会
- 相川 充 (2009). 多様な集団で交流するコンピテンシーを育成するソーシャルスキル教育の研究 東京学芸大学・ベネッセコーポレーション共同研究 キー・コンピテンシーを育成する新しい教育領域の研究 ソーシャルスキル分野研究報告.
- 相川 充・藤田正美 (2005). 成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の構成 東京学芸大学紀要 第1部門 教育科学, 56, 87-93.
- Belmont, L., & Marolla, F. A. (1973). Birth order, family size, and intelligence. *Science*, 182, 1096-1101.
- 福島 治 (2010). 家庭の人間関係 相川 充・高井 次郎 (編著) コミュニケーションと対人関係 (pp. 212-230) 誠信書房
- 浜崎信行・依田 明 (1985). 出生順位と性格 (2) 横浜国立大学教育紀要, 25, 187-196.
- 長谷川寿一・長谷川真理子 (2000). 進化と人間行動 東京大学出版会
- 平林 進・藤谷貴代 (2002). 出生順位と性別構成による性格について 名古屋女子大学紀要 (人文・社会編), 48, 75-85.
- King, C. A., & Kirschenbaum, D. S. (1992). Helping young children develop social skills: The social growth program. Brooks/Cole Publishing Company.
- (佐藤正二・前田健一・佐藤容子・相川 充 (訳) (1996). 子ども援助の社会的スキル：幼児・低学年児童の対人行動訓練 川島書店)
- 小林正幸 (1999). 序文なぜいまソーシャルスキルか 小林正幸・相川 充 (編著) ソーシャルスキル教育で子どもが変わる：小学校 (pp. 3-7) 図書文化社
- Kristensen, P., & Bjerkedal, T. (2007). Explaining the relation between birth order and intelligence, *Science*, 316, 1717.
- Laffey-Ardley1, S., & Thorpe, K. (2006). Being opposite: Is there advantage for social competence and friendships in being an

- opposite-sex twin? *Twin Research and Human Genetics*, **9**, 131-140.
- 前田健一 (1995). 児童期の仲間関係と孤独感 - 攻撃性, 引込み思案および社会的コンピタンスに関する仲間知覚と自己知覚. *教育心理学研究*, **43**, 156-166.
- Pulkkinen, L., Vaalamo, I., Hietala, R., Kaprio, J., & Rose, R. J. (2003). Peer reports of adaptive behavior in twins and singletons: Is twinship a risk or an advantage? *Twin Research*, **6**, 106-118.
- 嶋田洋徳・神村栄一・宇津木成介・安藤明人 (1998). 中学生用攻撃性質問紙 (HAQS) の作成 (2) - 因子的妥当性, 信憑性, 因子間相関, 性差の検討 - *日本心理学会第62回大会発表論文集*, 931.
- 嶋田洋徳・戸ヶ崎泰子・岡安孝弘・坂野雄二 (1996). 児童の社会的スキル獲得による心理的ストレス反応軽減効果. *行動療法研究*, **22**, 9-20.
- 嶋田洋徳・戸ヶ崎泰子・坂野雄二 (1994). 小学生用ストレス反応尺度の開発. *健康心理学研究*, **7**, 46-58.
- 新村 出 (1998). *広辞苑* 第5版. 岩波書店
- 杉村仁和子・石井秀宗・張一平・渡部 洋 (2007). 児童生徒用ソーシャルスキル尺度 (SSI-M) 開発研究報告書. 東京大学大学院教育学研究科教育研究創発機構. 教育測定・カリキュラム開発 (ベネッセコーポレーション) 講座. *Sokutei Report*, **5**.
- Sulloway, F. J. (1996). *Born to rebel: Birth order, family dynamics, and creative lives*. New York: Academic Press.
- Sutton-Smith, B., & Rosenberg, B. G. (1968). Sibling consensus on power tactics. *Journal of Genetic Psychology*, **112**, 63-72.
- 渡邊朋子・岡安孝弘・佐藤正二 (2002). 児童用社会的スキル尺度作成の試み (1) - *日本カウンセリング学会第35回大会発表論文集*. (佐藤正二・相川 充 (編) *実践! ソーシャルスキル教育: 小学校* (p. 127) 図書文化社から引用)
- 依田 明・深津千賀子 (1963). 出生順位と性格. *教育心理学研究*, **11**, 239-246.
- Zajonc, R. B., & Sulloway, F. J. (2007). The confluence model: Birth order as a within-family or between-family dynamic? *Personality and Social Psychology Bulletin*, **33**, 1187-1194.